



平成四年（う）第五二号

答

弁

書

傷害、準強姦

廣

野

秀

樹

右被告人に対する頭書被告事件につき、弁護人の控訴趣意に対し、左記のとおり答弁する。

平成四年一月四日

名古屋高等検察庁金沢支部

検察官 検事

名古屋高等裁判所金沢支部第二部 御中

松浦田記



一 所論は、事実誤認及び量刑不当の主張であるが、論旨はいずれも理由がなく、本件控訴は棄却されるべきである。

二 事実誤認の主張について

1 刑法第一七八条にいわゆる「抗拒不能」とは、~~心神喪失~~心神喪失以外の事由で心理的又は物理的に抵抗が不可能ないし著しく困難な状態を言うものと解されているところ、被告人は、原判決が「罪となるべき事実」に第一事実として認定しているとおり、被害者に対して執拗かつ過激な暴行を加え、これによって原判示のとおり同女に重篤な傷害を負わせているのであるが、引き続き原判示第二の姦淫時において、仮に被告人が右のような同女の客観的な傷害の程度を正確に把握していなかったとしても、被告人自身の自供等によれば、姦淫行為に及ぶ直前ころ、同女は苦しそうに呻き声を上げ、鼻血を少し出して倒れたまま体を

動かさず、起き上がろうともせず、姦淫時にもぐったりとしてほとんど口をきかず、言葉でかすかに拒否の意思を表明するのが精一杯で、被告人のなすがままになっていたのであり、被告人において同女がこのような状態にあることは十分認識していたばかりか、むしろこのような状態にあることを利用して姦淫行為に及んだのであるから、被告人が抗拒不能に乗じて同女を姦淫したことは明白であって、原判決の認定にいささかの誤りも存しない。

2 弁護人は、本件犯行当時被告人は心身喪失もしくは心身耗弱の状態にあったと主張するが、本件犯行に至る経緯、犯行動機、犯行時の状況、犯行後の被告人の行動、被告人の身上、経歴、その他供述内容等全体を総合的に検討してみても、本件犯行時に被告人の理非弁別能力が喪失しあるいは減弱していたことを窺わせるような事由は認められず、被告人に責任能力を認

めた原判決に何らの誤りも存しない。

よって、論旨は理由がない。

三 量刑不当の主張について

原判決が「量刑の理由」で説示しているとおり、前記犯行経緯、犯行動機、犯行状況、悲惨な結果、被害感情等に照らすとき、被告人に有利に斟酌すべき情状を考慮に入れても、原判決の刑の量定を不当とすべき事由は何ら見出し難く、論旨は理由がない。